

こくはくだいこうぶ かつどうちゅう
告白代行部、ただいま活動中!②

いしだ そら
石田 空・作

あさ か
朝香のりこ・絵



アルファポリスきずな文庫

目次

プロローグ

修学旅行係のゆううつ

006

第一話

だれかがだれかを好きになるとき

020

第二話

修学旅行は京都行き

076

第三話

好きって言葉じゃ許せない

144

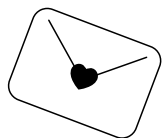
エピソード

ハロウィンパーティー!

191

あとがき

210



とう じょう じん ぶつ しょう かい
登場人物紹介



橘川 芽衣
おかし作りが趣味の
マイペース女子。
ちよびりミハー。

立神 さくら
告白代行部の部長。
製菓会社のCEOの娘で、
学校の有名人。

江藤 花音
さくらの幼なじみの文学少女。
代行部ではラブレターの
代筆をつとめる。

更科 莉子
ピリでヘタレな小学6年生。
押しに弱くて、こわったり、
自分の意思を主張するのが苦手。



莉子の幼なじみで、彼氏。
サッカー部に入っていて、
他クラスの子からモテる。

若王子 颯馬



芽衣のことが好きな
コワモノ男子。

佐賀見 健



京都に住む
花音の婚約者。

周防 稔



莉子と同じクラスの
体育会系男子。

渡辺 雅人



莉子と同じクラスの
文学系女子。

高山 堂

プロローグ 修学旅行係のゆううつ

「それでは、投票の結果、修学旅行係は更科さんと渡辺くんに決まりました」
クラス委員の無情な言葉で、私はがっくりとうなだれた。

今までは特に目立ったことはしていなかったから、私になにか大きな当番が回ってくることはなかった。でも、二期期に入って早々に目立ってしまったから、今日の係を決める投票で、面白半分に票を入れられちゃったんだ。

先生に「それじゃあ、更科と渡辺、前に出てー」と言われた。ただでさえ教壇の前に立つのは緊張するのに、これからは修学旅行までずっとこんなことが続くのかと思うと、げんなりする。

渡辺くんとは、席順の関係でときどき掃除当番がいつしよになる程度の仲だった。ものすごく仲がいい訳じゃないけれど、特に陰悪でもない。

身長は可もなく不可もなく。髪型も本当によく見る短く切りそろえた髪だ。ただこざっぱり

している雰囲気のせいかな、アイドルみたいにさわがれはしないけれど、男女ともに友だちが多い。サッカー部員じゃないけど、一番仲がいいのはサッカー部みたい。

「ええっと、修学旅行がんばりましょうー」

渡辺くんのいい加減で脳天気な言葉で、とたんに教室は笑いに包まれた。お調子者って訳ではないんだけど、ムードメーカーっていうか渡辺くんがしゃべるといい感じに空気が入れ替わる。

でも、私は気の利いた言葉は言えないし。ええっと、ええっと……

「よ、ろしく、お願いしますっ」

私はそう言っって頭を大きく下げた。

渡辺くんが空気を温めてくれたおかげか、しらせることはなく、そのまま席に着けた。自分の席に戻る際、私のほうを見る視線とぶつかった。若王子くんが頬杖をついて私を見ていたんだ。

口でパクパクと「がんばれよ」と言われているのに気付く、私は大きくうなずいた。

見た目ふつう、成績ふつう、運動神経ちよつと悪い……。そんな私がつい目立ってしまった理由。それが転じて、みんなから一斉に係の票を入れられてしまったその訳は。

うちの学年でも評判の、難攻不落なサッカー少年の若王子颯馬さんと私がお付き合いをはじめたことが、うつかり校内に漏れてしまったからだつた。

うちの学校は初等部から高等部までをくつつけた訳のわからないくらい大きな学校で、大すぎるせいとか、あんまり知られてないような教室や部活が存在する。

私、更科莉子がうっかりと若王子くんとお付き合いをはじめようになつたきっかけの、告白代行部もそのひとつだ。

告白代行部。名前のとおり、告白したい相手に対して代わりに告白をしてくれる部活動があるんだ。

私が若王子くんに告白するきっかけをくれたその部には、いろんな子が相談にやつてくる。学年が離れているせいで音信不通になつてしまつた相手がいたり。

突然芸能界デビューしてしまつたために連絡手段が一切なくなつてしまつたり。時にはがつしりした見た目を怖がられたくない一心で、告白代行部に相談にやつてくる人

だつている。

私はいつものように中等部校舎の階段を下りて、地下部室棟を眺めた。

まだ金木犀の季節には早いけれど、気のせいか金木犀のいい匂いがただよつていた。

「こんにちばー」

そう言いながら扉を開けると、ふつうの教室が広がつている。ここが告白代行部の部室だ。

「あら莉子さん、いらつしやい」

そう最初に声をかけてくれたのは、立神さくらさん。

黒くて長い髪がほつれることも乱れることもなく、彼女の背筋といつしよにしゃんと伸びている姿は格好いい。有名製薬会社のCEOの娘だったり、高校生の婚約者がいたり、いろんなオプシオンがたくさん付いている彼女が、告白代行部の部長だ。

私は空いている席に座ると、カバンを下ろした。

「ひどいんですよ。私、今日の学級会で修学旅行係になつちやつたんです」

「あれ？ あれつて投票で決まるんじゃないやなかつた？」

そう私に声をかけてきたのは、いつもクールな江藤花音さんだ。ポーカーフェイスで占いが得意だったり、文学少女だったり、きれいな字でラブレターの代筆をしたりしている彼女は、

さくらさんの幼なじみだったりする。

私は花音さんにうなずいた。

「……若王子くんと付き合っていることが、クラス中にバレちゃったんです……たまたまいっしょに学校帰りに公園でしゃべってたのを見られちゃったみたいで」

「あら災難。でも隠してないならいいじゃない」

「隠すつもりはなかったんですけど、ややこしいじゃないですか……」

私はそう言いながら、ゴロゴロと机の上で頭を転がす。

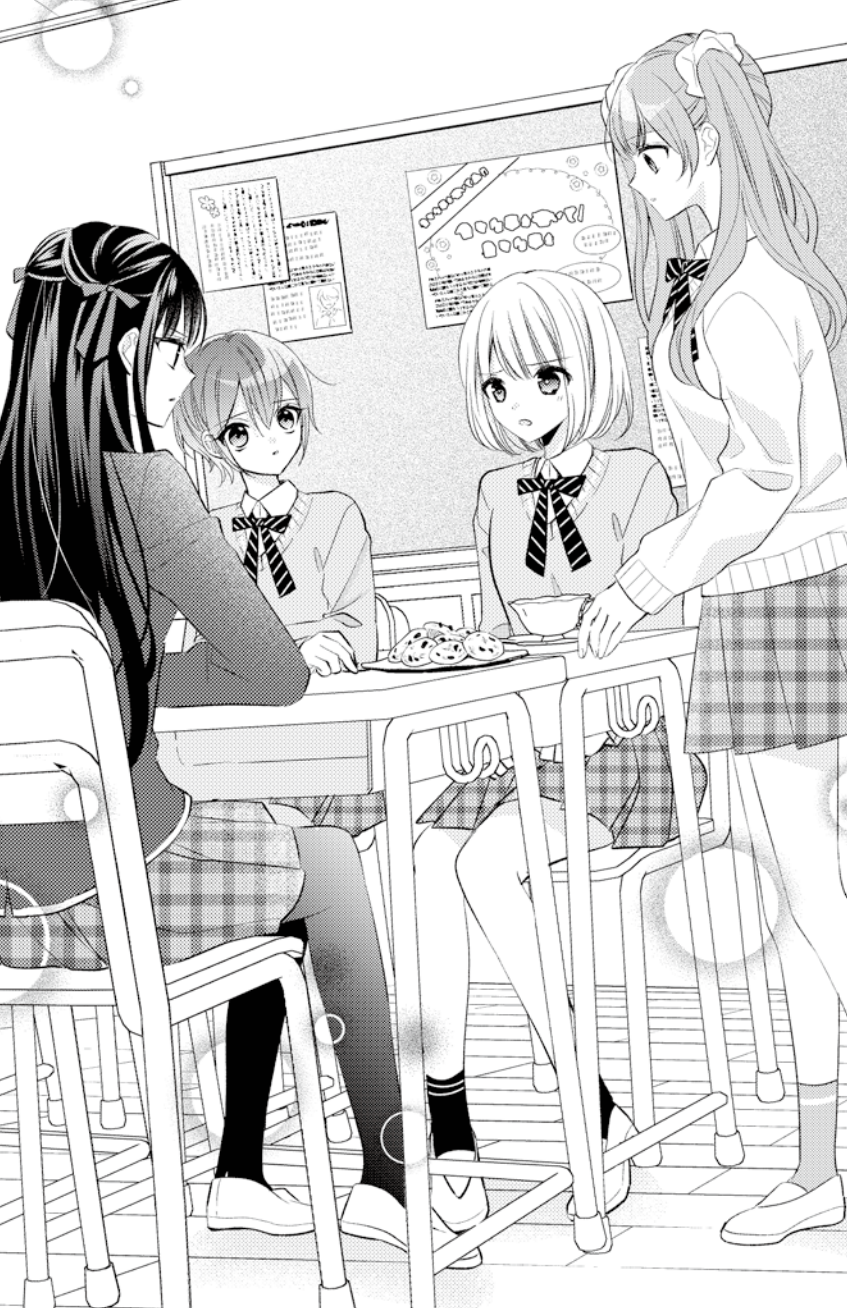
ひんやりとした机の感触が気持ちいい。

私が若王子くんに告白する経緯は、ちよつとややこしかった。

そのときに告白代行部のみんなに会わなかったら、私はもつとずつとヘタレなまま、まともに告白することもできずに、ひとりでうじうじする日々を過ごしていただろう。そう考えると、よかつたような悪かつたような。

そうしていると、「まあまあ」と言う声とともに、ひよいとお茶がさし出された。ふんわりとした香りは金木犀だけけれど、それだけじゃなくちよつと苦い匂いも混ざっている。

お茶を出してくれたのは橘川芽衣さん。とにかくかわいい人で、とことんマイペース。おか



しづくりが得意で、いつも私たちにおかしとお茶をふるまってくれる。

「あのう……これは？」

「やつと涼しくなったからねえ、フレーパーティー。アメリカンスコーンといっしょに食べるとおいしいよ」

そう言いながら勧めてくれたのは、三角形の生地（きじ）にぎつちりとチョコチップを詰め込んだアメリカンスコーンだ。ひと口食べるとサクツとした食感にチョコチップのほろ苦くて甘い味が後を追う。金木犀の香りのフレーパーティーの程よい苦みとマツチして本当においしい。

「ありがとうございます……ちよつと元氣出ました」

「人気者と付き合いはじめた弊害だねえ……若王子くんといっしょにすることで目立つちやつたんだ？」

「まあ、そうですねえ……」

サクツ、ホロツとした食感を楽（たの）しみつつも、私はなんとも言えない顔（かお）になった。

私がお付き合（あ）いをはじめることになった若王子くんはサッカー少年（しょうねん）で、同年代（どうねんだい）の中でも高めの身長や格好いい見た目のせいで、彼の不愛想な性格（せいかく）を知らない人からはやけに人気だった。

そんな高嶺（たかね）の花状態（はなごころ）だった若王子くんと、平凡（へいぶん）な私（わたし）が付き合（あ）い出すとなったら、当然（当然）悪目立（わるめだ）

ちしちやうんだ。

私は「うーん……」とうなりながら、またサクツとアメリカンスコーンをかじる。

「私のせいで、若王子くんに迷惑（めいわく）がからないといひんですけど」

そうボソリとつぶやいたら、三人とも顔（かお）を見合（あ）わせてしまった……あれ？

「……莉子（りこ）さん。あなた、それはいくらなんでもないと思うのよ」

三人を代表（だいひょう）して、おずおずとさくらさんが声をかけてきた。それに私はますます「あれ？」と首（くび）をかしげた。

「ええつと……私（わたし）、また変（へん）なこと言（い）いましたっけ？」

「変（へん）ではないけど、莉子（りこ）はもうちよつと自己評価（じこひやう）上げたほうがいい」

ボソツと花音（かおん）さんからもツツコまれ、私は助けを求（もと）めるように芽衣（めい）さんに振り返（かえ）った。すると芽衣（めい）さんはにこやかに言（い）い切（き）った。

「莉子（りこ）ちゃん莉子（りこ）ちゃん。ふつうに若王子（わかおうじ）くんのせいで巻き込まれただけなのに、自分のせいで勝手に負（お）い目（め）を感じるの（かん）はよくないと思うよ？ 若王子（わかおうじ）くんだって巻き込ま（ま）ん（こ）だ（ん）で（て）負（お）い目（め）を感じ（かん）てるかもしれないから、あんまりなんでもかんでも自分のせいで思うのはよくないよ」

「ええ……そんな風に思ったことなんて……」

「いや、むしろ、若王子くんにこのことはちゃんとグチを言ってもいいと思うけど。なんでもかんでも自分のせいで終わらせたら、若王子くんだってかわいそうだから」

さくらさんにまでツツコまれ、私は「ええ……」と思わずつぶやいた。

私からしてみれば、これ以上若王子くんをいじめないでほしかった。勝手な思い込みで自分を褒めた口でおとしめてくるんだから、本当にどうすればいいんだって思っちゃうよね。私だって考えてしまうもの。

若王子くんは、勝手に自分を持ち上げた子たちからさんざん落とされてきた子だから、私まで責める側に回るのはいくつかある。

私は「うーんうーんうーん」と考えてから、みんなに答えた。

「私まで若王子くんを責める側には回りたくないですよ。目立つからって若王子くんをすぐ話題にするのはよくない」

そう言ったら、花音さんはアメリカンスコーンをひと口かじってから、ボソリと言った。

「莉子はそのまんまできてね」

それにさくらさんも芽衣さんも大きくうなづくのだから、私は訳がわからないまま、アメリカ

カンスコーンを頬張った。

告白代行部の活動は、基本的に卒業生たちからの口コミ頼りで、大きく宣伝していない。

若王子くんが私と付き合い出したらすぐに話題になってしまったみたいに、人の恋路をおもちやにしてしまう人って、けっこう多い。だから、まじめに告白したい人たちに迷惑からないように、本当に困った人たちにだけ届くようになっていく。

そのため、部活に相談者がやってくるのは週に一度あれば多いほう、なにかしらイベントごとが近付いたらもうちょつと増えるくらいで、それ以外は芽衣さんの手づくりおかしを食べるのんびりしている。

二学期になったらイベントが多い。

私が係になつてしまった修学旅行もそうだけど、その前には体育祭がある。

「そういえば、体育祭はどんな種目に出るかも決めましたか？」

私があんなとはなしに話題にしてみると、芽衣さんは「うーん」と困った顔をした。

「私、運動そんなに好きじゃないからどうしようかなあと思っているところ。玉入れや綱引きって人気だからいつも競争になるでしょう？ 借り物競走は完全に運だし」

「ですよねえ……」

「そうね、運動が苦手な子はそうかもね」

さくらさんはのんびりと答えてからフレーバーティーをすすっている。

「さくらさんはどうなんですか？」

「私？ たぶんリレーの選手を頼まれるんじゃないかと」

「わあ！」

さくらさんはとにかくハイスペックだ。それで嫌味に感じないのは、さくらさんがあまりに堂々としているからだろう。

「すごいですねえ」

私が素直に言うのと、さくらさんはあつさり「ありがとう」と答えた。

そんな中、ふだんだったらなにかとクールなひと言を漏らしそうな花音さんは、知らん顔で本を読んでいる。

いつもはみんなで雑談しているときは読書しないからめずらしい。元々は文芸部に入部希望だったけど、なかったから告白代行部に来たらしいから、しかたないかもだけれど。

花音さんにも話題を振ったほうがいいかな。

私はどう言えばいいかなと頭でこねくり回していたら、「こら花音」とさくらさんが本を取

り上げにかかっていた。

「人の話しているところで本を読みはじめるのは行儀悪いでしょう？」

「……だって」

さくらさんと花音さんとはにかく仲がいい。でもいつもさくらさんがあれこれと指示を飛ばして、素直に花音さんが話を聞いているのばかり見ていたから、こうも反抗的な花音さんは初めて見たかも。

花音さんはそっぽを向いて、ボソボソとつぶやいた。

「……秋はゆううつなんだもの」

「あれ、花音さん。秋がキライなんですか？」

思わず疑問を口にしたら、花音さんはばつが悪そうにうなずいた。

「金木犀は好き。コスモスも好き。秋の季節自体は好きだけど……今年の秋はキライ」

私は意味がわからず、目をパチパチとさせて、助けを求めて芽衣さんのほうを向いた。ふだんから告白代行部のムードメーカーをしている芽衣さんだけれど、彼女も花音さんの言葉の意味がわからなかったらしく、困ったようにツインテールを揺らしている。

「ええつと……ごめんね。もしかして体育祭とか、修学旅行がイヤってことなのかな？」

それに私は「えっ？」と声を上げた。

体育祭がイヤというのはまだわかる。運動部以外の子たちは、私も含めてどうやって風邪引いてサボるかばかり考えちゃうイベントだから。

でも、修学旅行に行きたくないって気持ちは全然わからなかった。

私自身、修学旅行係に選ばれてしまって、たくさん厄介事を抱え込みそうになっているけれど、修学旅行自体は楽しみにしているからだ。

花音さんはだんまりを決め込んでしまって、それ以上はなにも言ってくれなかった。それにさくらさんはため息をついた。

「もう、花音ったら……ごめんさいね。この子もいろいろ思うところがあるみたいだから」
どうもさくらさんは、花音さんが修学旅行のなにをそこまでイヤがっているのか知っているみたいだった。

芽衣さんは「花音ちゃん」とのんびりと名前を呼んだ。

「なにか言いたくなったら声かけてね。なんでもできる訳じゃないけれど、話を聞くくらいだったらできるからね」

「うん……ありがとう。こっちこそごめん。空気を悪くして」

花音さんがボソボソと返事をするのを聞いて、私も思わず「あのっ」と声を上ずらせる。

「私も、全然頼りにならないですけど、話を聞くくらいだったらできますからっ」

そう言い切ると、花音さんはキョトンとした顔をしたあと、こつくりとうなずいた。

「うん、莉子もありがとう。でも修学旅行中は係で大変でしょう？ こっちに気をつかわなくともいいから」

その言葉に私は内心「あれ？」となっていた。

まるで花音さんにとつてのイヤなことは、修学旅行中に起こるような口ぶりだった。

うちの学校では修学旅行で毎年京都に行っている。京都は観光名所が多くって、歴史の教科書で習った場所が今も残っているという印象なんだけど……

京都に行くのがイヤなのかな？

考えてみたけれどちが明かず、私は「はい」とだけ答えた。

二学期に入ったらイベント目白押しで、もしかしたらイベントにかこつけて告白代行の相談もやってくるかもしれない。

私はそんな予感を胸に、今日の部活を終わらせたんだ。

第一話 だれかがだれかを好きになるとき

修学旅行係の役割は修学旅行のしおりづくりと、それぞれの班決め、先生からの連絡をみんなに伝えることだ。

寝るときは男女別に大きな部屋で分かれるから、部屋割りは心配ない。

問題は班決め。班を決めたら、修学旅行の予定ルートを修学旅行係に報告してから先生に伝えないといけないから、大変だ。

せっかくの修学旅行を、ギスギスしている班で回る訳にはいかない。だからと言って仲良しグループでそのまんま班をつくると、人数が多すぎて困るから、修学旅行係が調整する必要があるんだ。

どうしてこんな胃に穴が空きそうな係が存在していて、それを私たちに押しつけるんだらう。ホワイトボードにさらさらと班とメンバーを書いていく。

「そういえば、更科さんは若王子と最近付き合いはじめたんだっけ？」

じゃんけんで班決めするのを見守っている間、いつしよにホワイトボードに書き込みをしていた渡辺くんが声をかけてきた。それに私はビクツと肩を震わせ、持っていたペンを取り落としてしまった。

渡辺くんは笑いながら「ごめんごめん、続けて」とペンを拾ってうながしてくれた。

渡辺くんは若王子くんとも友だちだし、若王子くんの気難しい部分も知っているから変なこととは言わないと思う。

私はそう考えてからうなずいた。

「うん、付き合ってるよ」

「それだけだよあ、たしか告白代行部っていう部を利用したんだっけ？ 前に立神さんを見かけたことがあるからさ」

「あー……」

私が告白代行部に依頼したとき、さくらさんがうちの教室にまで様子を見に来たことがある。さくらさんは有名人らしくって、渡辺くんも知っていたようだ。

若王子くんもあれこれと言いふらす子ではないけれど、友だちには告白代行部の話をしていてもおかしくないだろう。私は「うん」とうなずいた。

なにを聞きたいんだろう？ 私と渡辺くんは
いっしょに修学旅行係に選ばれた以外だと、同
じクラスで、共通の知人に若王子くんがいるく
らいしか接点がないんだけれど。

私は唐突な話題に首をひねった。

「なんでこんなにじゃんけん終わらないの!？」
班分けじゃんけんはいまだに終わらず、私た
ちは手持ちぶさたのままだった。早く決まらな
いかなと待っている中で、渡辺くんが私に向
かって手を合わせた。

「頼む、告白代行部につないでもらえないか
な？」

「……はい？」

あまりにも思ってもいなかった言葉に、私は
少しびつくりして渡辺くんを見た。

窓を開けつぱなしにしているものの、まだ秋の気配とは程遠い、日差しがさんさんと降り注
いでいる。
空の色はすっかりと秋空なのに、気温はちつともおだやかにはなってくれない。

放課後、私は渡辺くんを連れて告白代行部の部室に向かうことになった。
中部部の地下部室棟は初等部にはほとんど知られてないから、渡辺くんは素直に「すげえ」
と喜んでいいる。

「ここって若王子は来たことあるの？」

「ないよ、若王子くんは私の部活にあんまり興味ないみたいだから」

「そうだなあ、若王子、付き合い出すまで恋愛ギライにまでなってたからなあ」
うんうんとうなずく渡辺くんに、私は思わず笑う。渡辺くんにまで、若王子くんがモテすぎ
るのが原因ですっかりかたくなになってしまっていたのは伝わっていたようだ。

それにしても、クラスメイトを告白代行部に連れて行くのは妙に新鮮な感じがする。



私は深呼吸して、とびらをコンコンと叩いた。

「こんにちはー、失礼しまーす。相談者連れてきましたー」

「はい、いらつしやい」

すでに来ていたさくらさんは、たぶん芽衣さん作のおかしを食べているところだった。今日持ってきたのは焼きドーナツのようだった。

花音さんはめずらしく、やる気なく机に突っ伏して寝ていた。

さすがに相談者が来たから、さくらさんが机を叩いて「こら花音、起きなさい」と起こした。そのそと起きはじめた花音さんの顔には顔に机のあとが付いている。

どうも花音さんは、修学旅行がイヤすぎてずっと調子を崩しているみたいだった。

「はい、焼きドーナツと麦茶です。よろしかったらどうぞー」

「ああ、すみません。俺甘いもの苦手なんで。でも麦茶はありがたういただきます」

「そっかあ、残念」

芽衣さんはあつざりと焼きドーナツを引っ込めると、麦茶だけ渡辺くんに出した。

告白代行部に相談に来るのは、基本的に噂を拾いやすい女子が多いけど、たまに男子も来る。とはいえ、クラスメイトをそのまんま連れてきたのは初めてだったけど。

「それで、お名前とご用件を教えてください」

さくらさんにうながされ、渡辺くんは麦茶をひと口だけ飲んでから口を開いた。

「はい、更科のクラスメイトの渡辺です。実は……修学旅行中に高山に告白したくて、相談に来ました」

「高山さんに？」

「はい」

あれ、これ私が聞いていいのかな。

少し顔を強ばらせていたら、トントンと芽衣さんが私の肩を叩いてくれた。手には渡辺くんから回収した焼きドーナツがある。

「ちよつと奥にまで行く？」

「えつと……はい」

私たちは部室の後方の席に座り直すと、もともと焼きドーナツを食べはじめた。

ふつうのドーナツは油で揚げているけれど、焼きドーナツはオーブンで焼いてある。そのせいか食感がケーキとドーナツの間みたいで面白んだよね。

おかし上手の芽衣さんのつくった焼きドーナツはもちろんおいしいけれど、知っている食感

よりも少しだけでもつちりしていて、不思議。

「おいしいですけど……ふつうの焼きドーナツよりもつちりしていますね。ふんわりしているのにもつちり？」

「えへへ、今回は豆腐ドーナツを焼いてみました。ふだんだつたら揚げてつくるんだけど、豆腐ドーナツって、揚げるとたまに爆発するから、今日は調子悪そうだなあと、思ってたオープンを使ったのです」

「なるほど……爆発したらそりゃ困る」

「ところで、高山さんって莉子ちゃんと同じクラス？」

「……はい」

「どんな子？」

「はい、大人しいけどいい子ですよ。図書委員やってるんです。でも意外だなと思いました」

渡辺くんは若王子くんと同じく体育会系だ。

昼休みになつたらボールを持って校庭まで走っていき、ずっとバスケットボールをして遊んでいるような活発な子だ。昼休みになつたら図書館で委員会仕事をしながらカウンターで本を読んでいる高山さんを気にしているのは初めて知った。

私は高山さんとは名字が近いから掃除当番がいつしよになることが多く、よくおしやべりするけど、渡辺くんとはだいぶ印象ちがうもんなあ。

私と若王子くんも無趣味と体育会系で、学校ではとことん相性が合わない。でも選ぶ映画や本の趣味は合うし、そもそも幼なじみだから共通の話題も多いけれど。渡辺くんと高山さんはどうなんだろうなあ。

そうこうしている内に、話がまとまったらしい。

「ありがとうございます、がんばります！ あと更科！」

「は、はいっ！」

思わず立ち上がると、椅子がひっくり返る。私があわあわといすを起こそうとすると、芽衣さんがかわりにひよいっといすを起こしてくれた。

「気にしなくたっていいから」

「ありがとうございます……はい、渡辺くんなに？」

「今日はここ連れてきてくれてありがとうございます！」

渡辺くんはそう快活にあいさつを済ますと、颯爽と去って行っちゃった。

さわやかな子だなあと、ぼんやりと思ひながら、私はさくらさんと花音さんの元へと寄って

いった。

「私はクラスメイトだから、あんまり聞いちゃダメかなと思って離れてたんですけど……」

「今回は大したこと話してないから大丈夫よ。どちらかというと、相談できる相手が周りにいないから、ここで相談したかっただけみたいだからね」

「そうだったんですか……まあ、たしかに」

若王子くんは自分のことで相当周りに迷惑をかけた分だけ、恋愛に関しては口が重い。そのせいで人の恋バナをできる限り耳に入れないようにしているところがある。

他の男子はお調子者がすぎて、秘密の話をうっかり漏らしかねない。

だからと言って女子も女子で「これはここだけの話だからね」っていう伝言ゲームで話が広まってしまふことがある。

告白代行部では暗黙の了解として、ここで聞いた話は部室の外では話題にしないようにしている。

わざわざ来てくれた相談者に失礼があつちやダメつてことだ。

私が納得している中、さくらさんは言った。

「まあ、彼はうちをわざわざ利用しなくつても、その内告白できそうな気はするんだけど。あ

れかしら。女子との距離感がわからないから、壁打ちに來たのかしらね」

「距離感、ですか？」

「女系家族の末っ子長男つてタイプにはたまにいるのよ。女子があまりにも話しかけやすい雰囲気だから、女子のグループにふつうに溶け込めるタイプの男子つて。でもねえ、それで距離感をまちがえると、サークルクラッシュヤーになつちやうのよ。失恋したときとか、友だちとケンカしたときとか、弱っているタイミングに優しくされると好きになつちやうことつてあるでしょう？」

「それは……ものすつごく反応に困りますね？」

若王子くんはふつうに男系家族の子だし、男友だちと遊んでいるほうが楽な子だけど。

そういうことを平気でできてしまう人だつたら、たしかに困つてしまうかも。

渡辺くんの場合はどつちなんだろうなあ。

クラスでの渡辺くんの言動を振り返っていたら、花音さんは「逆に」と手をヒラヒラとさせる。

さつきまでふてくされていたのに、ひさびさの相談者が來たせいとか、いつもの調子を取り戻しているみたい。

「女子との付き合いがなさすぎて、女子を勝手に神聖化しすぎる人も困るからね。ちよつとしゃべっただけで、優しくされたって舞い上がってしまうタイプはたまにいるから。それは男女関係なくだけれど」

「はあ……それもまた、困りますねえ。渡辺くんはたぶん、どちらにも当てはまらないとは思いますが……」

「でしようね。極端すぎる話だから。まあ、彼は大丈夫でしょう」

たぶん渡辺くんは、また近い内に相談に来るんだろうねということで、今日の部活は終わった。帰る準備をしていると――

「莉子さん」

「はい？」

さくらさんと呼び止められて、私は振り返った。

「一応だけれど、渡辺くんのことはだれにも言っちゃダメよ？」

「言いふらすような真似はしませんよ。渡辺くんの相手の高山さんも同じクラスですし」

「そうね。あと若王子くんにも言ったらダメだからね。莉さんは人がイヤがるようなことはまず言わない子だけれど、念のために」

「わかってますよ。私も言いふらして気まずい思いしたくありませんし。そもそも若王子くんに対して失礼ですから」

同級生間で気まずくなるのもそうだけれど。

若王子くんが友だちとギスギスするのはイヤだなあと、思ってしまったんだ。

相変わらず日差しが強い中、今日は体育委員が教壇に立っている。窓を全開にしているのに、ちつとも風が吹かないから暑いまままだ。

「それじゃあ、自分のやりたい種目をひとり三つ書いていって。人数多い種目はじゃんけんで決めるから！あと、運動部はリレーに全員参加だから、ホワイトボードまで来て。リレーの順番決めるから」

私は祈る思いで体育祭の希望種目を三つ選んだ。

運動神経がよくない人間は、とにかく目立ちたくないし、「お前のせいで負けた」みたいに言われたくないから、邪魔にならないところに参加する。

玉入れと綱引き、大玉転がしだったら、痛くないし人数がたくさんいるから大丈夫だろうと、そこに名前を書いて提出した。

お願いだからじゃんけんにならないで。

そう祈っていたら「更科」と声をかけられた。若王子くん。

うちのクラスにはサッカー部が多く、リレー参加者もほぼサッカー部だ。サッカー部のメンバーで順番を決めたらしく、若王子くんはアンカーになったみたい。

私は「おお……」と声を上げる。

「すごいね、アンカー。がんばってね」

「おう。それで更科はどれに希望出したの？」

「私は玉入れ、綱引き、大玉転がしに当たるといいなあ……」

「ふうん。借り物競走はなし？」

「あははははは……」

思わず笑ってしまった。

借り物競走は、その年の体育祭実行委員会によって、内容がだいぶ変わる。

ものすごく杓子定規な子に当たったのなら【帽子】【たすき】【鉢巻】と、比較的客席に

「貸して！」と叫べばくれそうなものを借り物にしてくれるけど……

愉快犯みたいな子に当たったのなら【カッター】【ハリセン】【ピコピコハンマー】など、正攻法では手に入らない受け狙いを仕込んでくる。

中には【好きな人】を入れて公開告白を迫ってくるような子もいるから、だれが体育祭実行委員会にいるか確認取れない場合は参加したがいらない子も多い。

私の場合は鈍くさいのを自覚しているから、受け狙いじゃなくても、まず勝てないからやりたくない。

「入れてないよ」

「ふうん。オレ、参加しようと思ってるんだけど」

「ひあ」

思わず変な声が出て、両手で口をふさぐ。

若王子くん、お付き合いはじめてから、いちいち爆弾発言してくるようになったのはなんでなんですか。

私があわわわしていたら、若王子くんはあつさりと言ったのけた。

「他は棒倒しとか行こうかなと思っただけ、棒倒しは逆に運動部入れないんだよな。『お前ら

がガチでやったら怪我人出るからやめろ』って」

「なるほど……」

棒倒しは力がふつうの子たちがやればそうでもないけれど、力の強い子たちががんばりすぎたらたしかに怪我人が出てもおかしくない種目だ。

若王子くんはいつものように、運動してないときはローテンションのままだ。

「それじゃあ、一応報告」

「う、うん？　ありがとう？」

若王子くんはさつきと自分の席に戻っていったので、私はしきりに首をかしげていた。

なんでわざわざ自分の出る種目を教えてくれたんだろう？　公開告白になったら覚悟しておけて宣言なのかな、単純に。

……応援してほしいからなのかなあ。

若王子くんの気持ちさがさっぱりわからないと、私はただ首をひねっていた。

そうこうしている内に、体育祭の種目の割り振りが決まった。幸いにも私は最初に書いた通りになつてくれたけれど。

私は体育祭の種目の発表を見ながら、頭の中で「おお」と感嘆の声を上げた。

借り物競走の箇所に、ちょうど渡辺くんと高山さんがいつしよに並んでいたのだ。渡辺くんは高山さんに告白しようと、しよつちゆう告白代行部に話をしに来ている。

このふたりも上手いくといいなあ。

そんなところに、思わぬ話が舞い込んでくるなんて、私は想像していなかったんだ。

相変わらず空の高さだけは秋なのに、日差しはちつとも秋になつてくれない。制服をパタパタあおぎながら、私は今日も地下部室棟に向かうところだ。中等部校舎に行くため、花壇を横切ると、花壇にはリコーシヤやシユウカイドウが咲いているのが見える。用務員の白石さんが毎日世話をしている花壇は今日もキレイだ。

全然すずしくならないけれど、花壇だけは秋なんだなあとぼんやりと思っていると、花壇の周りをうろうろしている子を見つけた。

その子は私と目が合うと、「あつ、あのう！」と声をかけてきた。

「告白代行部ってどこか知りませんか!？」

「はい？」

どうも告白代行部を探して花壇をうろうろしていたみたいだ。ポニーテールの活発そうな子で、制服の下にハーフパンツを穿いている。男子といつしよに校庭で走り回っている女子は、よくそうしているから、彼女もその手の子なんだろう。

私も花壇前のベンチで途方に暮れていた時に告白代行部のことを教えてもらったから、この子も白石さんあたりに教えてもらったのかもなあ。

私はそう思いながら、彼女を告白代行部へと連れて帰った。

部室に入ると、芽衣さんがレモンケーキ……芽衣さん曰く「ウィークエンド」と言われる名前のパウンドケーキなんだとか……と紅茶をふるまっていたところだった。紅茶の匂いが強いから、今日は私が来るまでにすでに相談者が来ていたらしい。

「あのう、私。六年D組の早見美奈子と言います。今度の体育祭に合わせて、告白代行を頼みたいんですが、大丈夫ですか？」

「はい、早見さんね。相手はこのどれかお伺いできますか？」

さくらさんは美奈子さんの前に座りながら話を聞いている。

芽衣さんがおかしを出している一方で、花音さんはさらさらと便せんになにかを書いている。

たぶん前に来ていた子たちのラブレターの代筆だろう。

さくらさんにうながされ、美奈子さんはもじもじと膝を揺らしてから、口を開いた。

「同じ学年の……渡辺雅人くんです！」

……うん？

私は思わずこわばった。

それ、うちのクラスの渡辺くんのフルネームだ。美奈子さんは同じクラスじゃないけど同じ六年生だ。さすがにうちの学校には同名はいなかったはず。

私はどうしようと、視線をおろおろとさまよわせていたら、「莉子ちゃん莉子ちゃん」と芽衣さんに呼ばれた。

私がうろたえたまま、芽衣さんに「はい」と答えるとウィークエンドをひと切れ差し出された。

「まずは落ち着いて」

「はい……」

ひと口頬張ると、ウィークエンドの優しい甘さに、レモンの香りがふわりと漂う。その味で少し落ち着いてから、私はちらちらとさくらさんを見た。

さくらさんは美奈子さんと数回会話をしてから、美奈子さんが元氣よく帰って行くのを見守った。それから、ようやくとこちらにやってきた。

「さすがにこれ以上は体育祭での告白代行は無理ね。私たち四人しかいないのに、分担するにしても多すぎて無理。今後は体育祭以降の告白代行だけ相談に乗ってあげて。あと莉子さんも顔に出さないでよく逃げました。芽衣もありがとう、莉子さんにおかし出して落ち着かせてくれて」

「はい」

相変わらずのマイペースな芽衣さんの返事を聞きつつ、私は「あのう……」と声をかけた。

「これって、どうすればいいんでしょう。どちらも告白代行の相談者になっちゃったって話なんですけど……」

渡辺くんも美奈子さんも、相談者になってしまったら、どうすればいいのかわからない。

それでもさくらさんの態度は変わらなかった。

「こういうことって減多にないんだけどね。ない訳じゃないから」

「い、いいんですかね、こういうのって」

私たちはすでに渡辺くんがだれを好きかを聞いている。

美奈子さんは本気でなにも知らないで告白代行を頼みに来ちゃったのだ。

これ、そのまま依頼を受けるのはフェアじゃないんじや……

どちらも私が声をかけられて連れてきてしまった手前、いたたまれなくて震えるしかない。すると、静かにラブレターの代筆をしていた花音さんが口を挟んできた。

「不幸な事故は、いちいち気にしなくていいと思うけど」

「そ、そうなんですけど……納得できないと言いますか、すわりが悪いと言いますか……」
私は抗議するものの、花音さんは淡々と言う。

「好きになった人が自分のことを好きだっていうの、本当に奇跡だと思うよ。好きでもどうしようもないことって、ふつうにあるから」

「……まあ、そうですね？」

たしかに、今までもそういう後味の悪いことにはふつうに遭遇している。

好きな子がアイドルになつてしまったがために、音信不通になつてしまったとか。初等部の子がひとりで中等部に来るのは危ないから、同じ校舎に入れるようになるまで無視を続けるとか。そもそも婚約者なのに、年の差が原因ですれちがっているとかなもあるんだから、告白したらそのまま受け入れるほうが稀なんだろう。

でも。私があれっ？ と思ったのは、花音さんの言葉だった。

私を知っている限り、告白代行部の中で唯一花音さんからだけ、浮いた話を聞いたことがなかった。

芽衣さんは同じ学年の武道家の佐賀見くんによつちゆう彼専用のおかしをつくっては、それを食べに来ている彼にふるまっている。ただ、佐賀見くんから告白しない限り進展がないだろうと、私たちはそれを遠巻きに眺めている。

さくらさんに至っては現在高校生の婚約者がいる。休みの日にデートに行くくらい仲がいい人だから、たぶん結婚適齢期になったら結婚するんだろうと思うけど。

花音さんからはそういう話を一切聞いたことがなかったから、てつきりそういうのに興味が無いのかと思っていた。

修学旅行に行くのを本気でイヤがっていたのに加え、今回の発言かあ。

花音さんについては、同じ部活にいながらもなかなか知らないことも多いなと思ってしまった。

さくらさんはなにかに気付いたらしく、花音さんのそばに寄っていつて「えいつ」とデコピンをした。

「痛い」

当然ながら花音さんはムツとした顔をしたものの、さくらさんはどこ吹く風だ。

「痛くしたの。あと花音、あんまり意地悪言ったらダメでしょ。それは美奈子さんにも、渡辺くんにも、莉子さんにも、ふつうに失礼だからね」

「……ごめん」

「い、いえつ」

私が慌てて手を横に振ると、さくらさんは話をまとめた。

「とりあえず。このことはこの場限りの話にしておいてね。特に莉子さん。今回はクラスメイト関連の話で心苦しいだろうけれど、我慢してね」

「わかりました……っ！」

私も一度、自分の恋で遊ばれてしまったことがあるし、そちら側には回りたくないもんなあ。私は勢いを付けて返事をしてから、ウィークエンドを平らげた。ウィークエンドの優しい甘さと、紅茶の後味を引く渋みはよく合った。

最近、私と若王子くんはいつしよに帰っている。

元々私たちは幼なじみだし、ご近所付き合いもあった関係だ。当然帰る方向は同じだし、付き合うまでもたまたま同じ時間に会えたらそのままいつしよに帰っていたけれど、今はちゃんと待ち合わせをしている。

サッカー部も今は大きな大会はひと区切り終えているから、練習試合中心でそこまで忙しくないらしい。

私は待ち合わせしている駐輪場に向かうと、「あつ、更科」と声をかけられた。

ちょうどユニフォーム姿の若王子くんだ。

「部活お疲れ様」

「よつす、そつちもお疲れ」

最近日は日が落ちるのが少し早くなってきたから、若王子くんがいつしよに帰ってくれるのは安心だ。私と並んで帰るときは、若王子くんは自転車から降りて、私のカバンを自転車のカゴに入れてくれる。

自転車を押しながら、ふたりでいつしよに歩く。空は少し暗くなっているものの、月も星もまだ見えない。それでも外灯はポツンポツンとともっている。

話題はもつぱら体育祭と修学旅行の話だ。

「もうすぐ体育祭の練習がはじまるなあ」

「そうだねえ。若王子くんずっと活躍するじゃない」

「そうかあ？ 運動部はサッカー部だけじゃないし。他のクラスに陸上部だらけのところもあるから、あいつらに勝てないとなあ」



「陸上部に勝つのは、さすがに難しいんじゃないかなあ」

陸上部の子たちは、本当に足から生まれてきたんじゃないかってくらいに足の速い子ばかりで、勝てるイメージが全く湧かない。

私がそう言くと、若王子くんは少しだけムスツとした。

「オレだって勝てますけど、陸上部に？」

「そうだね、アンカーだもんね……がんばってほしいけど、ケガは気を付けてね」

「おう。ああ、そういえば」

若王子くんがふいに話を変えてきた。

若王子くんはずっと体育祭を楽しみにしてたから、めずらしいなと思って顔を上げる。

「最近雅人がふわふわしてる。こそばゆいというか」

私は表情に出ていないかと、自分の顔の筋肉を気にした。

そうだ、若王子くんと渡辺くんはふだんから仲がいいんだから、渡辺くんになにかあったらふつうに若王子くんだって気付くんだよなあ。

「そうなんだ？」

声がひっくり返って悟られないかなとヒヤヒヤした。私はウソが苦手だから、相談者のこと

を守るためにはとぼけきるしかない。

「おう。あいつあんまり本読まないのに、ずっと図書館に通って歴史マンガ読んでる」

「……歴史の成績よくなりそうだねえ」

私がすつとんきょうなことを言って視線をそらすと、若王子くんは、「ふう」とため息をついた。

「更科、お前んとこの部に雅人通ってるだろ？」

「なつ、なんでっ!？」

思わず聞いてしまい、内心「しまった」と両手で口を押さえる。私の反応を見て、若王子くんはふたたび「ふう」とため息をついた。

「いったい何年いっしょにいると思ってるんだよ。更科はわかりやすいからわかるよ」

さくらさんに「絶対にだれにも言ってはダメ」と言われていたのに、私のうかつさのせいで早くも若王子くんはバレちゃった。

私は「あーあーうー……」と言葉にならない声を上げている中、若王子は「まあ、その辺で」と私の奇声を止めた。

「お前んとこの部でなにをどう相談してるかまでは聞かないけど……あいつは距離感まちがえ

やすいから、なにこともないといいな」

若王子くんが言っているのは、ちょうど前に花音さんも指摘していたことだ。

若王子くんの場合は、あまりにもモテて告白されまくっていたとき、相手のことを氣遣って、完膚なきまでにフッていたのが原因で、周りからのブーイングがひどかったんだ。

一方の渡辺くんは、人懐っこい性格が原因で、少しまちがえるとか八方美人にも見えてしまうんだ。渡辺くんの人当たりが良かったことなんだろうけど、本命以外からモテても困るよね。周りから勝手にひどい男扱いされるのと、周りから勝手に八方美人扱いされるの。どっちのほうが幸せなんだろうなあ。

そこまで思い返して、私はポツリと漏らした。

「好きな人が自分のことを好きって、すごく貴重なことだよね……」

それに若王子くんは「おう」と大きくうなずいた。

「こういうのって、ふつうはキセキって言うんだよね」

同じことを、部活中に花音さんも言っていた。

私たちは、大人と比べれば大した時間生きてないけれど、自分が好きな人が自分のことを好きっていうのは、滅多にないことだって、もう思い知っている。

だれかがだれかを好きになり、好きな相手同士が両思いだったらいよいよねって話なのに、どうしてこうも難しいんだろう。

「……渡辺くんが上手いくように、祈ってね」

「別に雅人は大丈夫だろ。本当にダメそうだったら、いつしよに部屋に遊びに行くから」

「うん、そうしてね」

結局はそういう、ふわつふわしたことしか言えなかった。

告白代行部は、あくまで告白代行までしかできないから、成功・失敗は関係ない。それでも、いつだってわざわざ相談しにやってきてくれた人の恋愛成就を願っているのね。

私が勝手に胃を痛めている間にも、時間は経過する。

その日は、修学旅行係で居残って、修学旅行のしおりをつくっていた。地図はスマホでも見られるけれど、ざっくりと目的地をたしかめるにはどうしても紙のしおりが必要だ。先生が用意してくれた紙に加えて、修学旅行係の会議で取り決められた紙もセットにして冊子にする。

私と渡辺くんはしおりを一生懸命手折りしては、大きめのホッチキスで留めていた。

「修学旅行の前に、体育祭だなあ」

「えっ？ そうだね」

渡辺くんは気のせいかな、少し浮かれているみたいだ。私にとつてはゆううつな体育祭だけれど、運動部や体力自慢の子たちは、比較的楽しみにしているようだった。

うちの学校では初等部は初等部だけ、中等部と高等部は合同で体育祭が行われる。有名メーカーがおかしや軽食の屋台を出すから、家族の応援に来た人にもおおむね好評だった。本当に疲れたときに、屋台でアイスを買って食べられるのはうれしいよね。

とはいえ、運動神経がない人間からしてみたら、いかに風邪を引いて休むかばかり考えるのだし、渡辺くんほどニコニコできない。しかも今回は、告白代行をたくさん抱えているから、四人で手分けしないと間に合わない。ふだんだったら行きたくない体育祭でも休む訳にはいかなんだ。

パチンパチンとホッチキスでしおりを留めながら、渡辺くんは言った。

「そういえば、更科はどれに出るんだっけ？」

「目立たないように、綱引き、玉入れ、大玉転がしだね」

「ああ、定番。あとさ、今回はフォークダンスあるからさあ」

「あー……」

それは忘れてたなあと、私は今更ながら思う。フォークダンスはよくある、男女別に輪になって踊り、一回踊るごとに相手を交替していくというやつだ。私はペアの順番が、身長順でも、名前順でも、どうがんばっても若王子くんとは踊れない。だから、「フォークダンス面倒くさいなあ」くらいにしか思っていないかった。

でも渡辺くんはちがうか。高山さんの身長は比較的高めで、渡辺くんの身長は男子の真ん中くらい。ふたりの身長は近く、順番によっては高山さんと踊れる可能性があるんだ。

「いいなあ」

私が言うのと、渡辺くんはニコニコと笑う。

「うんっ、楽しみにしてるんだ」

あまりにもくつたかない笑顔。たぶんこういうのが好きな子もいるんだろうなあと思う。私はしおりを折りながら、キヨロキヨロと辺りを見回す。

もう放課後だし、グラウンドには野球部のかけ声がひびいている。廊下は今はいない。基本的に告白代行部の内容は、よっぽどのことがない限り、外に持ち出すことはしないけれ

ど。今だったら相談者とふたりつきりだから大丈夫だね。

私は何度も確認を取ってから、やつとのことで口を開いた。

「でもそこまで元気に女子としゃべれるんだったら、告白代行って必要ないかな」

そりや、私たちでしゃべる練習をする分には、いくらでもしてくれてかまわないけれど。

元々しゃべりやすい雰囲気だった渡辺くんは、告白代行部に通いはじめてから、少しずつ女子との距離感が正されているような気がする。この分なら、私たちがわざわざ告白代行をしなくつてもいいんじゃないと思うんだけど。

私のポロリと言った言葉に、渡辺くんは「うーん」と腕を組んだ。

「若王子もだけどさ。女子にかんちがいさせるのは、困るよなあと思って。オレが今、更科とふつうにしやべれるのは、更科がすでに若王子と付き合っているからだって思うし」

「うん」

「女子と男子がしゃべってるだけで、勝手にかんぐる奴っているからさあ……それが原因で高山に誤解されるのは、やつぱり怖いよ」

「なるほど……」

高山さんは、私が知っている限りは、いわゆる恋に恋するタイプではない。たしかに読書は

好きみたいだけれど、現実と本の中をいつしよくたにはしない。だからなんでもかんでも恋愛に結びつけるような真似はしないと思う。

でも、渡辺くんが気にする程度には、なんでもかんでも恋にこじつけてしまう子は多い。

若王子くんの場合は勝手に期待されて、勝手に怒られてたな。好きじゃない相手に誤解されないようかんぶなきまでにフツていたのは若王子くんなりの優しさだったんだと思う。渡辺くんの場合も似たようなものを感じる。

「じゃあ高山さんへのアピールがんばってね。私も応援してるから」

「うん？　ありがとう！」

そうニカツと笑う渡辺くんを見て、内心美奈子さんのことを思った。

彼女の件は、私は一切聞わないと決めているし、さくらさんも渡辺くんと同じクラスの私がすべきじゃないだろうと判断してか、美奈子さんの告白代行についての情報を回してこない。

好きな子に告白したら、実は自分のことを好きだったなんて話、本当に滅多にないんだ。